

## 2-6.農村歌舞伎にみる歴史的風致

### (1)はじめに

浜松市は、市域の東西方向・南北方向に街道が通っている。これら街道を行き交う人々が、海と山と里との交流を育み、近世以降、歌舞伎をはじめとする特色ある文化や人・モノ・情報のネットワークを形成してきた。

我が国の地芝居・農村歌舞伎の起源は元禄年間(1688-1704)といわれているが、市内における地芝居・農村歌舞伎の起源ははっきりしていない。江戸時代、三都(江戸・京都・大坂)や伊勢・名古屋など限られた都市から離れた地域の人々はめったに見ることができなかつたので、一座を村に呼び観劇していた。その後、村人自身が演じることを思いつき、旅役者に手ほどきを受けて始められた。当時は農民が派手な衣裳を身に着け、歌舞伎を演じることは御法度だったが、神仏への奉納といえは許されたので、村々の祭りで上演されるようになった。市内では、横尾歌舞伎を伝える引佐町白岩地区の寛政6年(1794)の御定書に『神事の節又は盆中に狂言、あやつり或はにわか等決して致すまじき事』とあり、このなかに出てくる狂言が歌舞伎であることから、220年以上前から歌舞伎が行われていたことを確認することができる。

その後、明治から昭和前期にかけて市内の地芝居・農村歌舞伎は最盛期を迎えた。農村部の神社境内には常設の農村舞台が建てられ、神仏を敬う芸能奉納の場となるとともに、旧市町村の中心市街地には商業劇場が建設され、日常の娯楽として歌舞伎をはじめ舞台芸術に親しむ芸能空間が形成された。

現在、市内で継承されている農村歌舞伎は文化財指定や地域遺産認定を受けており、役者だけでなく太夫・三味線・下座音楽はじめ、化粧・着付・床山や歌舞伎用具の製作技術といった無形の文化遺産とともに、江戸時代からの台本・衣裳・鬘といった有形の文化遺産を後世に残し伝えるべく地域をあげて活動している。

現在、農村歌舞伎は、浜名区引佐町及び中央区雄踏町の範囲で行われている。祭礼余興として奉納される神社をはじめ、ゆかりの役者や芸能継承の歴史を伝える建造物が、地域をあげて取り組んでいる農村歌舞伎の伝統を引き立てている。



図2-6-1 東側上空から見た引佐町横尾・白岩地区



図2-6-2 西側上空から見た雄踏町宇布見地区

## (2) 引佐地域の農村歌舞伎と関連行事

### ① 農村歌舞伎の歴史

引佐地域における農村歌舞伎の起源は定かでないが、横尾歌舞伎が伝わる白岩地区に現存する寛政6年(1794)の御定書に歌舞伎の記載があることから、寛政年間(1789-1801)以前から当地で歌舞伎が行われていたことがわかる。

このうち、横尾歌舞伎は、横尾地区の氏神・八柱神社と白岩地区の氏神・六所神社の奉納芸能として別々に伝承されてきたが、明治44年(1911)横尾地区と白岩地区の青年団統合を契機に一緒に歌舞伎を行うようになった。両神社への奉納芸能であることから、氏子でもある舞台関係者は神社へ参拝するとともに、2社へ奉納する形式を守っており、現在でも2日間にわたり開明座で公演を行っている。(以前は、八柱神社例大祭当日の10月7日と六所神社の例大祭当日の10月8日に行われていたが、現在は10月第2土曜・日曜に行われている。)

昭和7年(1932)に書かれた横尾歌舞伎独自演目「井伊城物語」の台本や昭和8年(1933)の奉納額などが現存しており、大正から昭和前期にかけて、当地で盛んに歌舞伎が行われていたことがわかる。この頃の歌舞伎の担い手は、若者組の青年たちだった。当時、横尾・白岩地区に生まれ育った青年は、この若者組に入り舞台に立つことが半ば義務づけられていた。また、歌舞伎を行うにあたり青年だけではなく、地区の人たちや古老も演目や役割の決定に深く関わっていた。戦後、昭和40年(1965)に引佐町芸能保存会が組織され、これまで古老と青年たちが行っていた歌舞伎の運営や用具、衣裳、鬘などの整備を保存会が行うようになった。その後、昭和49年(1974)名称を横尾歌舞伎保存会とし、同年4月9日「横尾歌舞伎」の名称で静岡県指定無形民俗文化財に指定されている。



図2-6-3 寛政6年(1794)の御定書

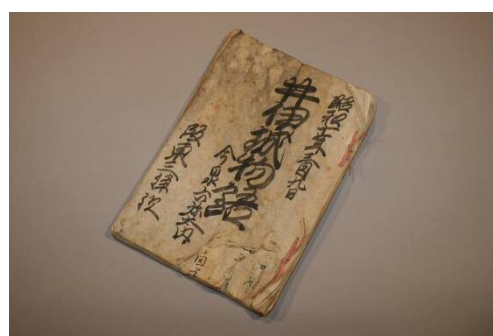


図2-6-4 「井伊城物語」台本



図2-6-5 奉納額(昭和8年(1933))



図2-6-6 定期公演(昭和49年(1974))



## ②歴史的風致を構成する建造物

### ア.八柱神社

浜名区引佐町横尾の八柱神社は、神宮寺川の小盆地に位置する横尾地区を見下ろす南向き斜面に建つ。横尾地区の氏神として、貞享2年(1685)八王子大明神として創立、明治3年(1870)八柱神社に改称し現在に至る。正哉吾勝速日天忍穗耳命・天之穂日命・天津日子根命・活津日子根命・熊野久須比命・多紀理比売命・市杵島比売命・多岐都比売命の8柱を祭神とし、津島神社など7社を境内社として祀る。明治36年(1903)の刻銘がある鳥居と石灯籠などが境内に残る。例大祭は10月に執り行われ、祭礼余興として歌舞伎が開明座で奉納される。



図2-6-7 八柱神社

### イ.六所神社

浜名区引佐町白岩の六所神社は、白岩地区の氏神として、慶長17年(1612)白岩大明神として創立、安永5年(1776)六所神社と改称し現在に至る。祭神は上津々男之命・中津々男之命・底津々男之命・表津綿津見之命・中津綿津見之命・底津綿津見之命の6柱で、境内社として津島神社など3社を祀る。



図2-6-8 六所神社

拝殿は桁行3間、梁間4間、切妻造、平入、瓦葺で棟札から大正3年(1914)に、石鳥居は刻銘から大正4年(1915)に建立されたことがわかる。横尾の八柱神社とともに10月の例大祭余興として開明座で歌舞伎が奉納される。

### ウ.奥山神社

浜名区引佐町奥山の神宮寺川左岸に位置しており、境内は山の斜面に石垣を積んで造られた平地にある。社殿は神殿、拝殿、舞台、社務所で構成されており、神殿と拝殿は長い石段を上った境内奥に南面して鎮座し、右隣に社務所が配される。南端の斜面に張り出して積まれた石垣上には北向きに舞台が建ち、中央の広い空間が客席となる。奥山神社は正和2年(1313)奥山大明神として創立、明治元年(1868)改称、明治22年(1889)現在地に遷座。祭神は応神天皇・天忍穗耳命・蛭子之命の3柱で、9月に例大祭を執り行う。



図2-6-9 奥山神社の舞台(正面)

祭神は応神天皇・天忍穗耳命・蛭子之命の3柱で、9月に例大祭を執り行う。

現在の神殿・拝殿・社務所は昭和 60 年(1985)に建て直したものである。棟東墨書により昭和 23 年(1948)に建てられたことが分かっている舞台は、桁行3間半、梁間5間、正面入母屋造、背面切妻造、妻入、瓦葺、側面及び背面に下屋付、正面の間口5間を全て開放して床を張り舞台とする。舞台下手<sup>1</sup>に下屋を設け、間口1間、奥行2間を支度部屋とする。舞台上手<sup>2</sup>には半間程の張り出しが設けられ、太夫の座と呼ぶ。舞台建築の特徴である正面の大きな開口が舞台にふさわしい正面の姿を造り上げている。昭和 62 年(1987) 1月に発行された『新築記念誌 奥山神社考』には、舞台新築直後の祭典余興に若者が演じる素人歌舞伎が奉納されたことが記されている。秋の例大祭では、急坂を駆け上った生き人形屋台が舞台正面に位置し、賑やかにお囃子が奉納される。参道石段下には、明治 26 年(1893)の銘がある社号標、明治 45 年(1912)の銘がある石鳥居などがある。

### エ. 開明座

浜名区引佐町横尾の開明座は、八柱神社及び六所神社の祭礼余興として横尾歌舞伎が行われる農村舞台である。開明座という名称は、明治期の再建時、文明開化にちなんで命名されたといわれている。当時の開明座は、回り舞台の機構を持つ常設舞台として祭典余興のほか、明治 39 年(1906) 4月には日露戦争凱旋記念公演、大正 4 年(1915) 10月には御大典祝賀余興として歌舞伎が上演されている。御大典祝賀余興では「絵本太功記 十段目」「菅原伝授手習鑑 寺子屋の場」「奥州安達原 三段目」など、現在の定期公演でも演じられている演目が上演された。現在の舞台は平成 11 年(1999)に建て直したものである。舞台敷地には手水鉢や記念碑(横尾歌舞伎発祥之地)などの石造物がある。手水鉢は「丸に橋」紋が中央に配されており『嘉永元年(1848)申五月』の刻銘がある。



図2-6-10 奥山神社の舞台(背面)



図2-6-11 奥山神社参道の石鳥居と石造物

参道石段下には、明治 26 年(1893)の銘がある社号標、明治 45 年(1912)の銘がある石鳥居などがある。



図2-6-12 開明座



図2-6-13 嘉永元年(1848)の手水鉢

<sup>1</sup> 客席から見て左の方の舞台

<sup>2</sup> 客席から見て右の方の舞台



### ③歴史的風致を構成する活動

#### ア.横尾歌舞伎定期公演

横尾歌舞伎の定期公演は、横尾地区の氏神・八柱神社と白岩地区の氏神・六所神社の奉納芸能として毎年10月第2土曜日・日曜日の2日間、開明座(東四村農村コミュニティセンター)で行われている。両神社への奉納芸能であることから、氏子でもある舞台関係者は神社へ参拝するとともに、2社へ奉納する形式を守っているため公演は2日間行われる。



図2-6-15 八柱神社例大祭



図2-6-14 定期公演当日の様子



図2-6-16 六所神社例大祭

横尾歌舞伎の大きな特徴は、役者、義太夫、三味線弾きから、振り付け・大道具・小道具の製作・衣裳や鬘の手入れ・舞台の照明・音響などの裏方を含め、すべて地区の人々の手で賄われている。また、横尾歌舞伎では質の高い芸を維持するため年間を通じて稽古を行い、絶えず演技や演奏技術の向上を図っている。



図2-6-17 衣裳の手入れ

公演の運営は、横尾歌舞伎保存会と横尾・白岩地区で組織する東四村自治会の主催で行われる。保存会各部代表による運営委員会により、上演演目や稽古・準備日程の調整など、公演全体に関わることを協議・決定する。9月中旬、保存会員、自治会役員と世話人が開明座に集まり、各自の役割分担など公演全体に関わることの最終確認が行われる。定期公演を控えた1週間前に開明座にて会場準備が始まる。照明・舞台・音響・花ビラ(御祝儀)掲



図2-6-18 のぼり立て

示などの設営分担はあらかじめ決められており、手際よく行われる。客席周りには提灯が飾り付けられ芝居小屋ならではの雰囲気を作り出す。横尾地区を通る開明座前の街道にはのぼりを立て公演が近いことを知らせる。舞台係はいかに短時間で舞台転換が行えるかを試行錯誤し、何度も調整を繰り返す。

公演当日は早朝から売店の支度を始める。この日に合わせて栽培した朝採りの新鮮なトウモロコシを提供する。おでん、だんごなどの食べ物や、飲み物も準備して、客席で歌舞伎を見ながら食べる。これこそが農村歌舞伎ならではの光景である。

祝儀はひいきの役者や舞台関係者に届き、花ビラ書き係が書にしたため、客席や会場入口に張り出す。



図2-6-19 売店の支度



図2-6-20 花ビラ(御祝儀)の掲示

また、役者の化粧は代々師匠から受け継ぎ、化粧をしながら徐々に役へ入り込んでいく。子供の役者は親に化粧を手伝ってもらいながら、年々覚えていく。衣裳の着付けは重労働で、衣裳係が数人がかりで行う。役者が身に着ける衣裳と鬘かつらは、保存会の床山衣裳部とこやまが年間を通してしっかり手入れをして管理している。



図2-6-21 化粧の様子(保存会)



図2-6-22 化粧の様子(子供役者)

定期公演は両日とも、舞台を清める舞として歌舞伎舞踊「寿式三番叟ことぶさしきさんばそう 宝の入船たからいりふね」が最初に上演される。舞台上に祭壇を設え、塩をまいて舞台を清めた後、幕が振り落とされ新しい舞台に転換する。保存会下座げざに少年少女三味線教室の生徒も加わった出囃子の華やかな舞台さんばそうで三番叟が演じられる。その後、保存会若手による「菅原伝授手習鑑すがわらでんじゅてならいゆがみ 車曳きの場くるまび」や横尾歌舞伎文化財少年団による子供歌舞伎、保存会ベテランによる演目など、3～4演目が上演される。

なお、横尾歌舞伎では、大歌舞伎や他の地芝居じしばい・農村歌舞伎と異なる独自の所作や演出を見ることができる。これは、歌舞伎を伝えていく過程で変容し、独自に発展した結果であるといわれており、長きにわたり地域固有の文化として継承されてきた歴史を物語っている。

表2-6-1 平成30年度横尾歌舞伎定期公演役割分担

役割		人数
本部(保存会役員、自治会役員)		6人
花びら書き係		6人
受付・接待係(自治会役員)		12人
弁当・酒係		3人
交通整理係		8人
進行係(保存会広報部)		1人
化粧(保存会化粧部)		1人
太夫・三味線係(保存会三味線義太夫部)		16人
少年少女三味線教室		5人
ツケ打ち(保存会付け打ち部)		2人
下座係(保存会下座部)		7人
舞台係(保存会舞台部)		13人
音響係(保存会音響部)		2人
照明係(保存会照明部)		1人
衣裳・床山係(保存会床山衣裳部)		8人
芝居係	保存会	21人
	少年団	16人
	付き添い・後見	12人

表2-6-2 平成30年度横尾歌舞伎定期公演日程

日程	内容
5月20日(日)	少年団・少年少女三味線教室入団式
5月	演目・配役決定
6月	稽古開始
7月14日(土)	東四村祇園祭りでの演目披露
9月24日(月・祝)	定期公演打合せ会
10月6日(土)	鬘・衣裳合わせ 「寿式三番叟 宝の入船」稽古上げ
10月7日(日)	会場設営
10月10日(水)	「白浪五人男 稲瀬川勢揃の場」稽古上げ
10月11日(木)	「菅原伝授手習鑑 車曳きの場」稽古上げ
10月12日(金)	「神霊矢口渡 頓兵衛住家の場」稽古上げ
10月13日(土)	定期公演初日
10月14日(日)	定期公演千種楽
10月15日(月)	片付け・慰労会



表2-6-3 平成 30 年度横尾歌舞伎定期公演次第

日時	内容
初日 10月13日(土)	午後4時00分 開演 保存会長挨拶
	午後4時05分 自治会長挨拶
	午後4時10分 <small>ことぶきしきさん ぼ そう たから いりふね</small> 寿式三番叟 宝の入船 (少年団・少年少女三味線教室) 終了後インタビュー
	午後4時50分 来賓挨拶 (浜松市北区長)
	午後5時00分 <small>すがわらでんじゆ て ならいかのみ くまび ば</small> 菅原伝授手習鑑 車曳きの場 (保存会)
千穂楽 10月14日(日)	午後4時00分 開演 <small>ことぶきしきさん ぼ そう たから いりふね</small> 寿式三番叟 宝の入船 (少年団・少年少女三味線教室)
	午後4時25分 浜松市長挨拶
	午後4時55分 <small>すがわらでんじゆ て ならいかのみ くまび ば</small> 菅原伝授手習鑑 車曳きの場 (保存会) 終了後インタビュー
	午後5時50分 <small>しらなみ ご にんおとこ いな せ がわせいぞろい ば</small> 白浪五人男 稲瀬川勢揃の場 (少年団)
	午後6時40分 <small>しんれい やぐちのわだし とん べ えすみか ば</small> 神霊矢口渡 頓兵衛住家の場 (保存会)
午後7時55分 手打ち式	



図2-6-23 「寿式三番叟 宝の入船」



図2-6-24 「菅原伝授手習鑑 車曳きの場」



図2-6-25 「白浪五人男 稲瀬川勢揃の場」



図2-6-26 「神霊矢口渡 頓兵衛住家の場」



図2-6-27 手打ち式



## イ. 東四村祇園祭

定期公演に先立つ毎年7月の祇園祭において、この年に上演される演目をお披露目する。化粧を施し、衣裳と鬘を着用した歌舞伎人形を屋台に乗せ、横尾・白岩地域を引き回す。

東四村の祇園祭は、横尾の氏神・八柱神社と白岩の氏神・六所神社に末社として祀られている津島神社の祭礼として行われる。東四村における祇園祭の始まりは定かでないが、文化12年(1815)6月銘の牛頭天王宮再建棟札が六所神社に残されていることから、このころには祇園信仰に基づく祭礼が行われていたことが分かる。また、近代以降の横尾地区及び白岩地区の区有文書によると、明治時代には大八車を改造・装飾したものに太鼓を載せて地域を引き回しており、大正時代には隣村の神宮寺からお囃子が伝えられたとある。昭和前期には組立式の本格的な屋台が建造され、青年会が化粧し衣裳を着けて人形に扮する「生き人形」屋台を巡行している。

現在の屋台は昭和58年(1983)建造されたものが使われているが、農村歌舞伎の継承活動と一体となった歌舞伎人形お披露目の伝統は今なお受け継がれている。これらの歌舞伎人形と屋台製作(装飾)は、保存会役員立会いのもと、舞台部と床山衣裳部が中心となって行っている。

## ウ. 奥山神社例大祭の生き人形屋台

奥山神社の例大祭は、毎年9月最終土日(10月1日より前の土日)に行われている。奥山神社文書に昭和前期の例大祭催行の記録があることから、このころには行われていたことが分かる。奥山神社の例大祭では、境内での神楽や手筒煙火奉納、氏子範囲の屋台の引き回しが行われる。このうち、小斉藤「小組」の屋台には、歌舞伎役者と同じように化粧して衣裳を着けた子供が扮する生き人形が載せられる。生き人形の製作にあたっては、横尾歌舞伎で用いる衣裳・鬘などが提供され、保存会床山衣裳部が化粧や着付けを担当する。引き回しの最後には、生き人形屋台が神社境内に続く急坂を上がり農村舞台の前に位置すると、賑やかなお囃子が奏されクライマックスを迎える。



図2-6-28 人形屋台の製作



図2-6-29 人形屋台



図2-6-30 人形屋台の巡行





図2-6-31 生き人形屋台



図2-6-32 生き人形屋台の巡行

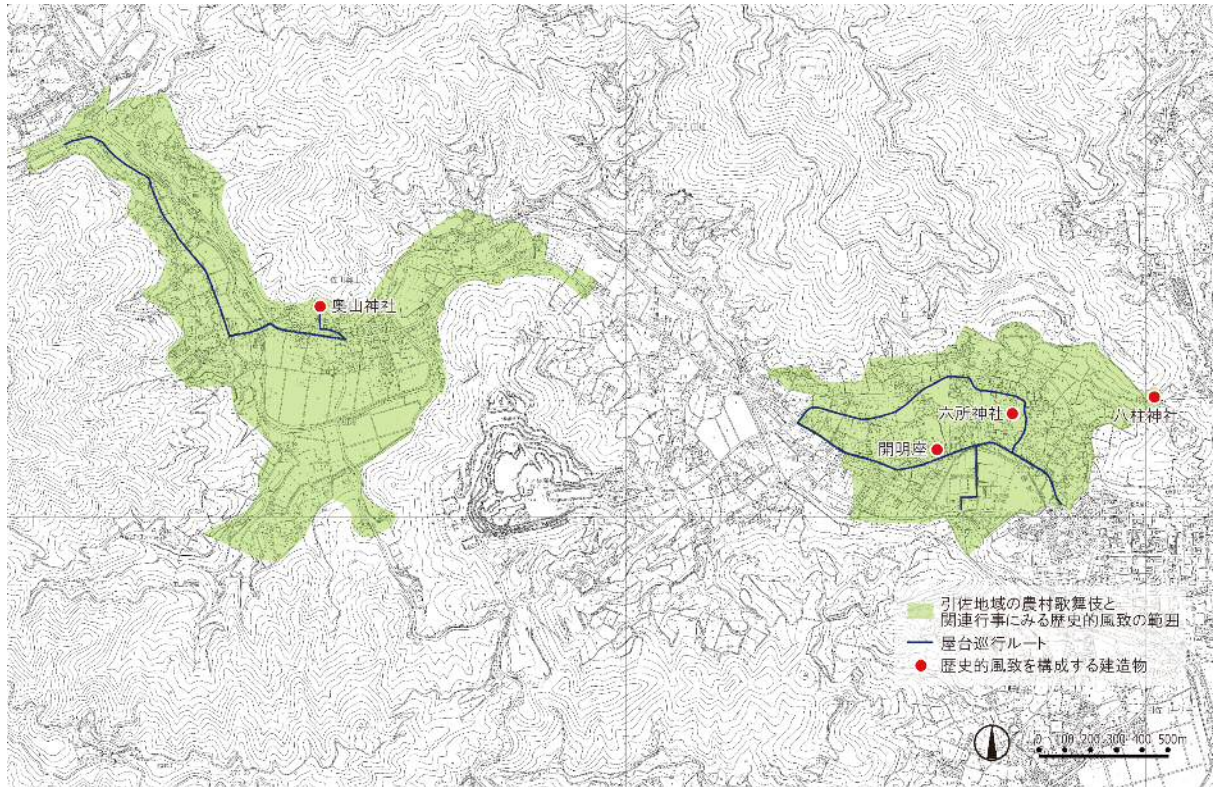


図2-6-33 歴史的風致の範囲(浜名区引佐町地域)



### (3) 雄踏地域の農村歌舞伎

#### ① 農村歌舞伎の歴史

雄踏地域に伝わる農村歌舞伎は「万人講」と呼ばれている。慶応元年(1865)の「万人講用軒別割付控帳」に雄踏町宇布見地内で歌舞伎を上演した記録があり、村の若者や有志の者による「万人講」と呼ぶ講が組織され、興行していたことが分かっている。「万人講」という言葉は、社寺の勧進講に由来するものと言われ、村の者が誰でも自由に参加して講をつくったため「万人講」と呼ばれるようになった。また、他町の祭礼記録にも宇布見の名が散見される。隣接する舞阪町では「東海道舞坂宿西町祭礼入用帳」嘉永3年(1850)に歌舞伎狂言を興行した記録があり、その際、鳴物と床山を宇布見から雇い入れたことが記されている。

雄踏地域では、明治から大正・昭和にかけて万人講による素人歌舞伎が村内各所で盛んに演じられ、そのころ使われていた明治期の台本が残されている。明治・大正期には、神社祭典に伴って上演され、その舞台は、息神社の社務所、津島神社の舞台、西ヶ崎白山神社の舞台などがあり、特に津島神社の舞台は、字名を冠して「浅羽の舞台」と呼ばれ人気があった。このころは奉納芸能としての性格が色濃く、浅羽の舞台に隣接する津島神社拝殿には大正4年(1929)11月御即位禮記念の万人講上演記念の奉納額が掲げられ、また、妙楽寺には大正から昭和にかけての万人講関係者の碑が建てられたりしている。

その後、大正初期に常設館「カネ六」が開業、大正11年(1922)に「喜楽座」が開業されると、歌舞伎は奉納芸能としてだけでなく、娯楽として気軽に楽しめるようになった。戦中は上演しない時期も

あったが、戦後すぐに復活、戦後復興の一環として劇場などで万人講が上演された。昭和24年(1949)「喜楽座」が「西遠劇場」へ改称すると、全町あげて万人講の特別興行が催されるなど、農村歌舞伎が雄踏地域の人々の戦後復興の支えとなった。

現在、平成元年(1989)に結成された雄踏歌舞伎保存会が万人講の伝統を受け継いでいる。



図2-6-34 農村歌舞伎の台本(明治期)



図2-6-35 万人講公演(昭和21年(1946))

## ②歴史的風致を構成する建造物

### ア.津島神社

中央区雄踏町宇布見に所在する津島神社は、須佐すさ之男命ののみことを祭神とする。鎮座年は不詳だが、社殿の棟札が残る江戸時代から海上安全と五穀豊穰を祈念し、海陸生業者の信仰を集めている。かつては境内西側に間口6間、奥行4間の社務所があり「浅羽の舞台」と呼ばれ、しばしば万人講公演が行われた。「大正四年十一月御即位禮記念」の万人講公演奉納額が掲げられている拝殿は、入母屋造、妻入、瓦葺で、寛政11年(1799)に建立されたことが棟札から分かる。境内には、大正4年(1915)の刻銘がある社標や大正8年(1919)建立の石鳥居のほか、一間社流ながれ造、銅板葺の本堂は棟札により昭和3年(1928)に再建されている。万人講ゆかりの神社として、舞台関係者が参拝するなど、社殿と万人講が一体となって、地域の歴史文化を今に伝えている。

### イ.妙楽寺

中央区雄踏町宇布見に所在する妙楽寺は、文禄4年(1595)開創の臨済宗方広寺派の寺院で、境内には、昭和13年(1938)の銘を刻む寺標が残る。境内の北に位置する墓所には、近代の万人講関係者(義太夫・役者)の追善興行を記念して建立した碑が存在する。大正5年(1916)建立の「神村彦七之碑」、大正6年(1917)建立の「坂東國代之碑」、昭和3年(1928)建立の「澤村源三郎之碑」の3碑があり、公演前には出演役者はじめ、舞台関係者が参詣する。



図2-6-36 津島神社

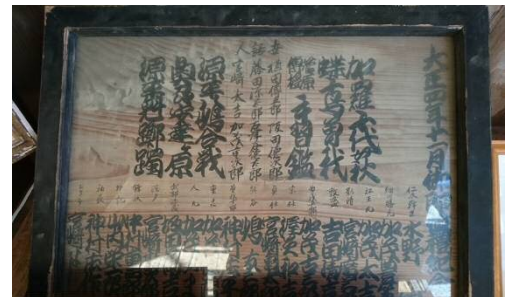


図2-6-37 「大正四年十一月御即位禮記念」奉納額



図2-6-38 昭和13年(1938)の妙楽寺寺標





図2-6-39 故神村彦七之碑



図2-6-40 故坂東國代之碑



図2-6-41 故澤村源三郎之碑

### ③歴史的風致を構成する活動

#### ア.雄踏歌舞伎「万人講」定期公演

雄踏歌舞伎「万人講」の定期公演は、毎年1月第3日曜日、雄踏文化センターで行われている。

定期公演の運営は、小学生から70歳代までの幅広い年代の地域の人々で構成される保存会により行われている。

1月の定期公演に向けた活動は7～8月ごろから開始され、公演に出演する子供役者の募集を兼ねて、夏休み期間中に子供向け体験講座を実施する。新たな役者の募集と並行して、振付指導者(市川升十郎一門)と上演演目の協議を行う。秋までには配役を決定し、役者に台本が渡される。定期公演の約2か月前、12月に入ると本格的な立ち稽古が始まる。年末年始の休みをはさみ、ほぼ毎日夜間に稽古が続けられる。公演準備と並行して、保存会関係者は定期公演の成功を願い万人講ゆかりの津島神社や妙楽寺の記念碑に参拝する。

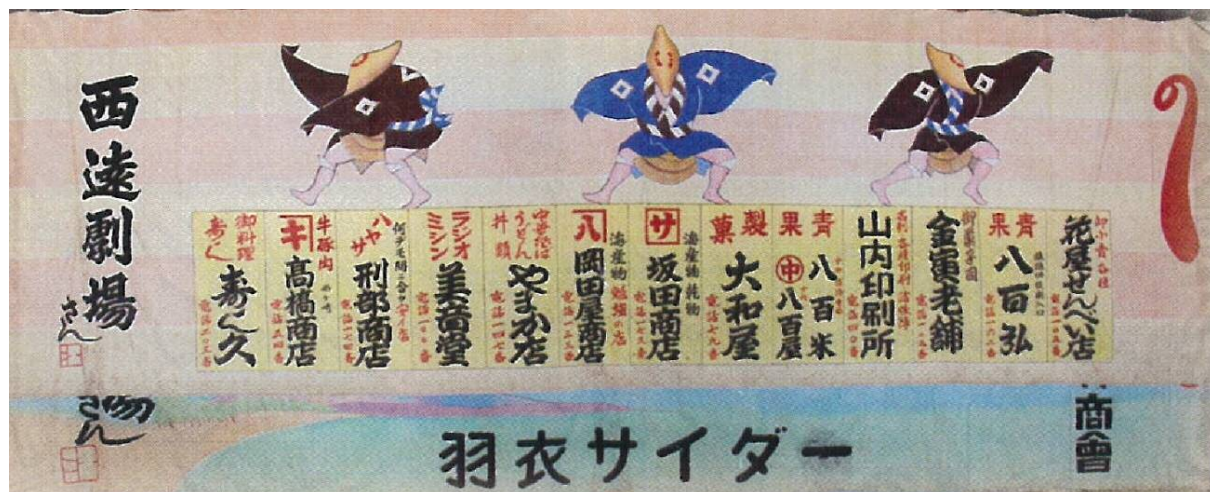


図2-6-42 定期公演で掲げられる「西遠劇場」の舞台幕

定期公演の前日、会場設営と実際の舞台での通し稽古が行われ、当日を迎える。会場周辺には、鼯鼠筋から送られたのぼり旗が冬の季節風「遠州のからっ風」にはためき、入口付近には御祝儀を記したエビが張り出されるなど、芝居小屋の雰囲気醸し出される。

定期公演は開演を<sup>ことほ</sup>寿ぐ歌舞伎舞踊「<sup>ことぶきしきさんばそう</sup>寿式三番叟」で幕開けする。その後、後継者育成を目的とした子供歌舞伎「<sup>べんてんむすめ おのしらなみ いなせがわせいぞろい</sup>弁天娘女男白浪 稲瀬川勢揃の場」と保存会による荒事・世話物・松羽目物など4～5演目が上演される。配役数に対して保存会員の人数が揃わない場合は、1人2役又は3役で対応することもある。

<sup>よこお</sup>横尾歌舞伎同様、公演当日は早朝から売店の支度が始められる。お茶や弁当だけでなく地域の和菓子が販売されるなど、飲食を楽しみながら鑑賞する農村歌舞伎の醍醐味が今も受け継がれている。

なお、振付指導とともに役者の化粧や衣裳の着付は専門業者に依頼しているが、舞台設営や大道具は保存会が自ら行っており、かつての農村舞台(神社の舞台など)で行われていた伝統技術を継承すべく錬磨している。



図2-6-43 「寿式三番叟」



図2-6-44 「本朝廿四孝 十種香の段」



図2-6-45 「身替座禅」



図2-6-46 「弁天娘女男白浪 稲瀬川勢揃の場」



図2-6-47 「「與話情浮名横櫛 源氏店の場」



図2-6-48 手打ち式



表2-6-4 平成 30 年度雄踏歌舞伎万人講定期公演役割分担

役割	人数
振付指導 <small>いちかわますじゆうろう</small> (市川升十郎一門)	2 人
太夫 <small>たゆう</small>	1 人
三味線	1 人
下座 <small>げざ きね やけん</small> (杵屋健社中)	1 人
衣裳(川上貸衣装店)	3 人
外題解説	1 人
付け打ち	1 人
黒子・後見	3 人
施設・大道具	20 人
受付等	8 人
役者	20 人

表2-6-5 平成 30 年度雄踏歌舞伎万人講定期公演日程

日程	内容
8 月 1 日(水) ～ 3 日(金)	子供のための <small>まんにんこうざ</small> 万人講座
8 月	演目決定
8 月	出演者決定・役決め
9 月	台本読み練習開始
12 月	所作練習開始
1 月 19 日(土)	舞台設営 総練習
1 月 20 日(日)	定期公演

表2-6-6 平成 30 年度雄踏歌舞伎万人講定期公演次第

日時	内容
1 月 20 日(日) 午前 10 時 00 分	開演 <small>ことぶましきさん ば そう</small> 寿 式三番叟
午前 10 時 50 分	あそびごろのサークル活動 和太鼓部
午前 11 時 35 分	<small>ほんちようにじゆうし こう じゆっしゆうこう</small> 本朝 廿四考 十種香の段 (子供歌舞伎)
午後 0 時 50 分	<small>みがわりざ ぜん</small> 身替座禅
午後 2 時 30 分	<small>べんでんむすめ おのしらなみ いなせ がわせいぞろい</small> 弁天娘 女男白浪 稲瀬川勢揃いの場 (子供歌舞伎)
午後 3 時 15 分	<small>よ わ なさけうきなのよこぐし げんじ だな</small> 與話情 浮名横櫛 源氏店の場
午後 4 時 10 分	手打ち式

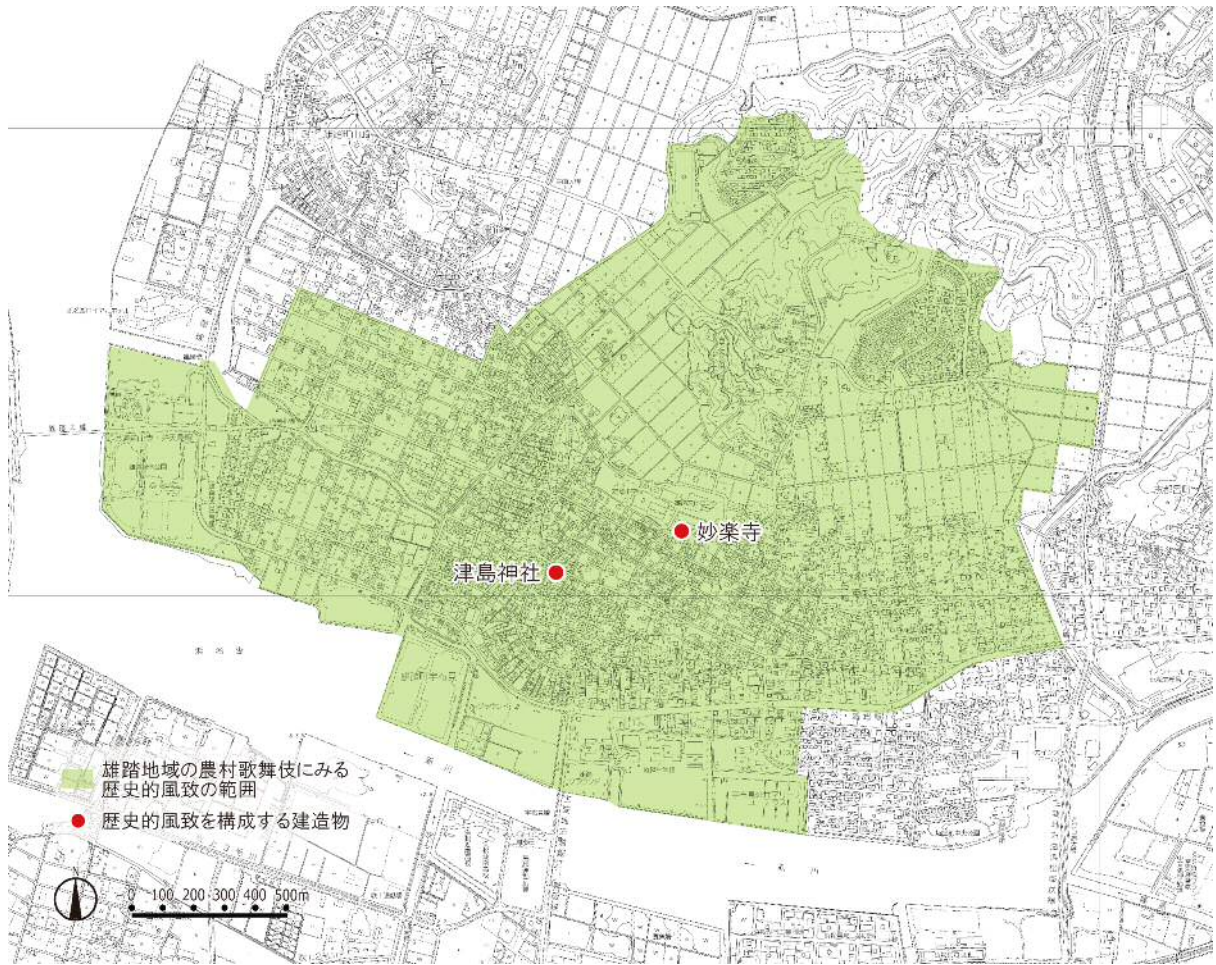


図2-6-49 歴史的風致の範囲(中央区雄踏町地域)



#### (4)まとめ

江戸時代以来、浜名区引佐町・中央区雄踏町に暮らす人々のささやかな楽しみとして継承されてきた農村歌舞伎は、それぞれの風土に根付いた信仰や先人の顕彰の形を示すものであると同時に、地域のコミュニティ活動を活性化させる潤滑油として重要である。神社社殿や生き人形屋台の巡行、定期公演ののぼりが掲げられるまち並みや農村景観などが一体となって、維持向上を図るべき良好な歴史的風致が形成されている。

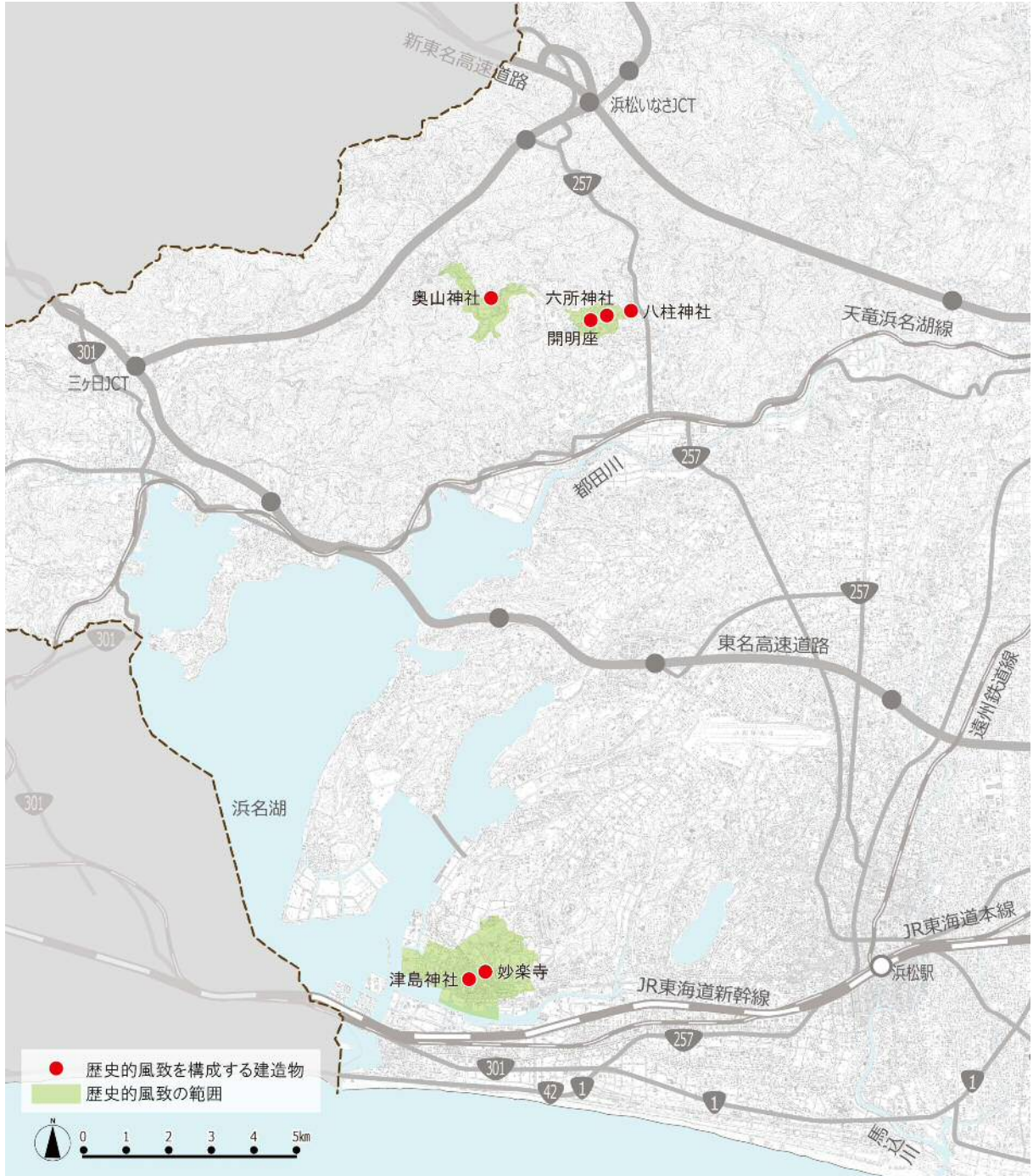


図2-6-50 歴史的風致の範囲

## 農村歌舞伎を支えるモノ・ヒト・コト

### 農村舞台

横尾歌舞伎が継承されている奥浜名湖地域には、祭礼余興などで農村歌舞伎が演じられた常設の農村舞台が多く存在していた。平成7年(1995)発行の『引佐町史 民俗芸能編』では、開明座をはじめ引佐町内の18か所が紹介されている。これらの農村舞台は、華やかな装飾などではなく素朴な造りであったが、回り舞台・太夫座・楽屋などの舞台装置を備えているものもあった。さらに、神社境内や広場を客席として利用できるよう立地しており、周囲の社叢林や石垣など敷地全域を芸能空間として設定していた。

歴史的に見れば、農村舞台は必要な時に組み立てられた臨時・仮設施設であり、常設されても社会経済の浮き沈みや価値観の変化など、時代の流行に左右されるものであったため、その存在は限りなく儚いものである。現存する農村舞台がある集落では、建物(モノ)だけではなく、祭礼など地域行事(ヒト・コト)と一体となった空間性・精神性を循環させることで、儚く消えるかりそめではない持続可能な伝統を受け継いでいる。



図2-6-51 狩宿の農村舞台(解体前)



図2-6-52 秋祭りで使用される様子

### 歌舞伎用具と製作修理技術

市内の農村歌舞伎を継承する保存会では、江戸時代からの歌舞伎用具(大道具・小道具・衣裳・鬘・台本など)を所有・管理している。これらの歌舞伎用具は、先人が製作したり、または買い求めたりしたもので、浜松市における農村歌舞伎の歴史を示す貴重な民俗資料である。

このうち、横尾歌舞伎保存会では、役者・義太夫・三味線弾きを育成するとともに、衣裳や舞台製作など、いわゆる裏方の保存技術継承にも積極的に取り組んでいる。保存会には役者などとは別に専門性を持った技術集団として、舞台部や床山衣裳部などが組織されており、年間を通じて歌舞伎用具の保存管理と製作修理を担っている。

歌舞伎用具とその製作修理技術をはじめ、連綿と受け継がれてきた地域のヒト・モノ・コトが相互に連携・連動して機能することで本市の農村歌舞伎を支えている。



図2-6-53 昭和25年(1950)の大小道具帳



図2-6-54 保管されている鬘・衣裳



浦川歌舞伎の盛衰 ～尾上栄三郎が伝えた江戸文化～

天竜区佐久間町浦川の地には、当地で没した江戸の歌舞伎役者・4代目尾上栄三郎をしのぶ村人により始められた素人歌舞伎「浦川歌舞伎」の歴史が刻まれている。浦川歌舞伎は、市内の他の農村歌舞伎と異なり、神事(神社への奉納芸能など)に由来するものではなく、発祥の起源と人物が明確な点が特徴である。

『嗚呼尾上栄三郎』(昭和33年(1958))は以下のように伝えている。安政年間(1854-1860)、地方巡業に出た昔羽屋一門の尾上栄三郎が信州飯田で病に倒れた。治療のため蘭学の名医・三輪見龍がいる遠州裏鹿(浦川)に来たが、既に手遅れの状態だったが、三輪医師の治療と村人の看護により一時的に快方に向かった。しかし、余命を悟った栄三郎は、安政5年(1858)、世話になった村人への恩返しのため病の体に鞭打って舞台に立ち「仮名手本忠臣蔵五段目・山崎街道の場」の早野勘平を演じている最中に舞台で倒れ、帰らぬ人となった。その後、栄三郎の歌舞伎に魅了された村人による素人歌舞伎が盛んとなり、常設舞台「旭座」等での上演・鑑賞が定着した。

特に昭和20～30年代(1945-1964)には、地区の消防団対抗歌舞伎が行われるなど、人々の生活の一部となっており娯楽の中心は歌舞伎であった。しかしながら、社会情勢の変化とともに昭和40年代、浦川での素人歌舞伎の活動は一旦休止した。

休止から20年余、平成元年(1989)、栄三郎130回忌を機に素人歌舞伎復活の機運が高まり、佐久間町観光協会浦川支部や休止前の歌舞伎経験者により「浦川歌舞伎保存会」が結成され、同年9月には再開、第1回の定期公演が開催された。再開にあたっては、栄三郎が伝えた江戸歌舞伎の伝統を守るため、役者は女性を入れず男性だけでやることとした。(小学生が出演する子供歌舞伎を除く。)

平成の間、保存会が舞台を守ってきたが、浦川歌舞伎の定期公演は令和元年(2019)を最後に再び休止している。尾上栄三郎が伝えた江戸文化の息吹は浦川の地で再開の時を待っている。



図2-6-55 定期公演「白浪五人男」



図2-6-56 「毛谷村彦山権現誓助剣」



図2-6-57 浦川のまち並み



図2-6-58 尾上栄三郎塚

## 第 2 章

浜松市の維持及び向上すべき歴史的風致